

自然遊学館 だより

2001 春号 (No.20)

2001.2.15

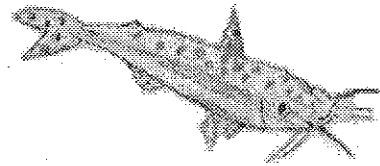
二色浜パークタウンでタイガーシャベルが！

南米産の大型ナマズの一種であるタイガーシャベルが 2000 年 12 月 1 日、二色浜パークタウンのだんじり小屋の前にある池で見つかりました。これを発見した寺田拓真君（貝塚市立二色小 6 年）は採集してすぐに「変な魚がいた！」と自然遊学館に持ち込んで来ました。調べてみると熱帯魚店でも売られているタイガーシャベルです。今は全長 8 cm ほどのかわいい幼魚ですが、成長するとなんと 1.5m 以上になります。ふるさとの広大なアマゾン河では、仲間たちがゆうゆうと泳いでいることでしょう。

最近、ペット店では魚に限らず、爬虫類や昆虫、哺乳類まで外国の生きものが多く売られています。かっこいいスタイルが人気を呼び、興味本位だけでついつい買ってしまふ人が多いと聞きます。そして最後まで面倒を見きれずに、むやみに野外に逃がすことも増えています。ささいなことと思いがちですが、この行為ははもともと日本に住んでいた生物種の存続をおびやかすことにつながるなど深刻な問題をはらんでいます。

現在、このタイガーシャベルは自然遊学館の熱帯魚水槽で飼育していますので、どんな魚なのか見に来てくださいね。

(山田 浩二)



タイガーシャベル

え：二色小 5 年 市原唯里

鳴く虫の声を聞く会

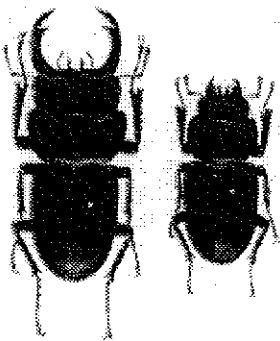
当館の秋の恒例行事である鳴く虫の声を聞く会が、2000年9月6日の午後5時から、名越千石荘において行なわれました。大阪市教育委員会の加納康嗣氏を講師に迎えて、約20名の市民の参加がありました。最初に、日本の鳴く虫の声を聞く習慣の歴史、虫売りの歴史、外国における鳴く虫の声を聞く文化の話があり、次に、バッタ、コオロギ、キリギリスの触角や聴覚器官の形態の違いや鳴き方の違いの話がありました。その後、参加者全員で、十分に暗くなってから鳴き始めた虫たちの声を聞き、採集も行ないました。

以下に、鳴き声を聞いたか採集できた種のリストを示します。☆印は、泣き声を聞くことができた種を示しています。

アオマツムシ ☆
 マツムシ ☆
 カンタン ☆
 カネタタキ ☆
 エンマコオロギ ☆
 クサヒバリ ☆
 ハヤシノウマオイ ☆
 セスジツユムシ ☆
 オナガササキリ
 シブイロカヤキリモドキ (幼虫)
 オンブバッタ
 ツチイナゴ (幼虫)
 ショウリョウバッタ
 オオカマキリ
 ハラビロカマキリ
 ヒナカマキリ

一昨年の行事で聞くことができたスズムシの声は、去年も今年も聞くことができませんでした。また、採集したカンタンの腹部覆面が黒っぽくない個体が出て、コガタカンタンかもしれないという話でした。コガタカンタンはキイチゴ類に生息し、最近四国をはじめ各地で発見されています。千石荘にはヒロバナカンタンも生息するので、充分注意して検討・調査する必要があるということでした。

(岩崎 拓)



ヒメオオクワガタ

和泉葛城山のヒメオオクワガタ？

ヒメオオクワガタ *Dorcus montivagus* (Lewis) は主にブナ帯に棲息するクワガタムシで、オオクワガタよりもスリムで、あしが長いのが特徴です。成虫は6～10月にかけてヤナギの仲間やハンノキの樹皮を自分で傷つけ、そこからしみ出る樹液を吸います。大阪府内で本種の棲息が確認されているのは、金剛山頂のブナ林のみで、しかも採集記録は1970年、1988年の2例しかありませんでした。しかし自然遊学館に収蔵している、故菊池行道氏から寄贈された標本の中に、「和泉葛城山」というラベルのついた本種1♂が見つかりました。残念ながら採集年月日は記録されていませんが、周囲の標本ラベルから推測すると、1950～60年代のものと思われます。同じく「1962.8.3 金剛山」というラベルのついた本種1♂も見つかり、貴重な資料が本館に収蔵されていることになりました。

紀伊半島における本種の棲息地は、前述の金剛山(1125m)、和歌山県護摩壇山(1372m)、奈良県弥山(約1900m)など、標高1000m以上の山地で、これらに比較すると、和泉葛城山(858m)は標高がかなり低いといえます。しかし和泉葛城山のブナ林には他にもコルリクワガタ、オニクワガタ、アカアシクワガタなどの、ブナ帯特有のクワガタムシが棲息しており、その種数では他の標高が高い山にもヒケをとりません。よって、和泉葛城山に本種が棲息していた可能性は高く、もしかすると今でもひっそりと暮らしているかもしれません。このような昆虫達がいっまでも棲息することが出来るように、和泉葛

城山のブナ林を、大切に守っていかねばなりません。

(田中 良尚)

近木川河口の生きもの観察会

日 時：平成 12 年 9 月 15 日

講 師：児島 格氏 (日本貝類学会会員)

鍋島靖信氏 (大阪府立水産試験場)

参加者：69名 (スタッフ 9名)

天 候：曇り時々晴れ一時にわか雨

例年通り、河口から約 300m上の川岸に広がる左岸のヨシ原で“カニ釣り”を行いました。付近の植生はアレチウリやカナムグラ、ヤブガラシなどのつる性の植物がはびこり、参加者は餌のタクアンをカニの巣穴の近くに落とすのに苦労している様子でした。釣果はクロベンケイガニが一番たくさん釣れたのに対して、アカテガニは 1匹しか釣れませんでした。

クロベンケイガニ

(採集数♂34♀11、甲幅 14.5~35.0 mm)

順	採集者	甲幅(mm)	♂、♀
1	埜邨美彩子	35	♂
1	三浦 勝也	35	♂
3	高野晴一郎	34.5	♂

ハマガニ

(採集数♂12♀10、甲幅 23.3~40.0 mm)

順	採集者	甲幅(mm)	♂、♀
1	埜邨彩紀子	40	♂
2	川端 幸平	39	♂
2	熊谷 大地	39	♂

アシハラガニ

(採集数♂2♀3、甲幅 24.5~28.0 mm)

順	採集者	甲幅(mm)	♂、♀
1	スタッフ	28	♂
2	岡田真太郎	27	♀
2	スタッフ	27	♀

アカテガニ

スタッフの釣った 1 個体のみ (未計測)

カニ釣りの後は川の護岸を海に向かって進み、ハクセンシオマネキの生息地を観察しました。この場所は一面に砂泥の干潟でしたが、今年は抽水植物のイセウキヤガラの群落が広がり、干潟域の大部分を覆い尽くすほどでした。ハクセンシオマネキは潮が引いてまだあまり時間が経っていなかったもので、活動している個体数は少なかったのですが、ハサミを振る動作のウェービングや、砂泥をハサミで口に運ぶ摂餌行動が見られ感嘆の声があがっていました。また、ぬかるんだ場所ではヤマトオサガニの姿がありました。

昼食をはさんでゴミ拾いの後は、海に面した干潟の生きもの観察へと移りました。参加者は干潟に足を取られながらも波打ち際まで歩み寄ったり、転石をひっくり返したりしてどんな生きものがあるか興味を持って探している様子でした。しばらく後、満ちてくる潮に追われながら岸に戻り、講師よりまとめの話を聞きました。最後に児島先生から各参加者に貝の標本がプレゼントされました。

転石干潟 (左岸テトラ横)で確認された生物
刺胞動物……タテジマイソギンチャク
環形動物……スゴカイ、カンザシゴカイ sp.

貝類……ホトトギスガイ・コウロエンカワ
ヒバリガイ・タマキビガイ・アラレタマキ
ビ・マルウズラタマキビガイ・イボニシ・イ
シダタミガイ・マガキ・アサリ・カラマツガ
イ

甲殻類……タテジマフジツボ・シロスジフジ
ツボ・ユビナガホンヤドカリ・ケフサイソガ
ニ・ヒライソガニ・カクベンケイガニ・ヒメ
アシハラガニ・ハクセンシオマネキ（稚ガ
ニ）・オサガニ・ヤマトオサガニ・ヒメヤマ
トオサガニ・チチュウカイミドリガニ

魚類……ミミズハゼ

(山田浩二、渡部哲也)

コクワガタ（成虫2♂2♀・幼虫2）
スジクワガタ（成虫1♀）
カブトムシ（幼虫1）
キマワリ（幼虫3）
ナミテントウ（多数）

植物

春日橋付近……フユイチゴ、ヒヨドリバナ、
イワタバコ、ヤブツバキ、ウツギ

本谷林道……モミジガサ、クサアジサイ、カ
ンスゲ、イロハカエデ、エゴノキ、アスナロ、
ウラジロガシ、イヌガヤ、ケヤキ

源流地点……ミカエリソウ、クロモジ、ヤマ
アジサイ、ハナイカダ、シラキ

近木っ子探検隊 近木川源流探検

2000年11月25日、近木っ子探検隊は、
近木川を源流までさかのぼりました。杉木立
の急斜面を延々のぼり、行き着いた先は、わ
ずかに水が流れ出ているだけの、小さな谷で
した。源流発見の記念に、近木っ子探検隊員
の名前を書いた杭を立ててきました。帰り道、
蕎原の道路脇でナミテントウが、越冬場所と
思われる電柱に多数群れ集まっているのが
観察できました。残念ながら、近木川源流に
棲息している、ブチサンショウウオを発見す
ることはできませんでした。以下に観察また
は採集できた種を示します。

タゴガエル（成体1）

ヘビトンボ（幼虫1）

ヒラタドロムシ（成虫3）

カワゲラ（幼虫1）

千石荘のトンボ探し

2000年5月14日、緑まぶしい千石荘周
辺の林野へ、トンボを探しに出かけました。
10時すぎに千石荘バス停を出発、大井谷池、
ボタン池、牛神池をめぐる、盛んに活動する
生物たちの姿を観察しました。以下に観察ま
たは採集できた種を示します。

トンボ目……シオカラトンボ・ハラビロトン
ボ・アオモンイトトンボ・ショウジョウトン
ボ・ギンヤンマ sp・クロイトトンボ・ヨツ
ボシトンボ

チョウ目……サトキマダラヒカゲ・ヒメウラ
ナミジャノメ・コチャパネセセリ・ツマグロ
ヒョウモン・コムスジ・モンシロチョウ・ア
オスジアゲハ・ヤマトシジミ・ナミアゲハ・

クロアゲハ・イチモンジチョウ・カラスアゲハ・ツマキチョウ・ルリタテハ

甲虫目……ウリハムシ・ウバタマムシ・クロウリハムシ・コクワガタ・ナナホシテントウ・ニジュウヤホシテントウ・ヒゲコメツキ・オジロアシナガゾウムシ・ハナムグリ・ハナカミキリ sp.・マイマイカブリ (死体)

その他……アカヘリサシガメ・マルカメムシ・クマバチ・アワフキムシ・ツチガエル・アメリカザリガニ

第4プールヤゴ調査

2000年6月11日、梅雨時のどんよりとしたくもり空の下、スタッフ6名、一般参加者53名で第4プールのヤゴ調査を行いました。このプールではコノシメトンボが多く、採集された大部分のヤゴは、西小学校のとんぼの池に搬入されました。

今回の調査で確認されたヤゴを含む水生昆虫の種数・個体数は以下のとおりでした。

トンボ目 (幼虫)

シオカラトンボ 20

コノシメトンボ 489

羽化殻：シオカラトンボ 4

ショウジョウトンボ 1

コノシメトンボ 85

カメムシ目……コオイムシ、マツモムシ、コマツモムシ、ミズムシ、コミズムシ

甲虫目……ゲンゴロウ sp.

市民の森 セミの抜け殻・クモ調査

残暑きびしい2000年8月26日の午前10時から、市民の森においてセミの抜け殻およびクモの調査を行いました。市民の森ができて今年で7年目になりますが、今回初めてセミの抜け殻調査を行いました。しかしながら残念なことに、セミの抜け殻を発見することはできませんでした。市民の森に産卵された個体が、まだ幼虫のまま羽化していないのでしょうか？クモについては、昨年観察されていた帰化種のセアカゴケグモが再び観察されました。観察された昆虫・クモの種は以下のとおりでした。

昆虫……クマゼミ、ツヤマルシラホシカメムシ、ツツレサセコオロギ、ショウリョウバッタ、キアシハサミムシ、シオカラトンボ、ツマグロヒョウモン、アカタテハ、キチョウ、ヤマトシジミ、イチモンジセセリ、アゲハチョウ、アオスジアゲハ、クマバチ

クモ……セアカゴケグモ 11♂3♀、ジョロウグモ、クロガケシグモ、ウツキコモリグモ、ウロコアシナガグモ、アシナガグモ、ハエトリグモ、エビグモ、コガネグモ sp.、ヒメグモ sp.

午後からは、夏休み中にみんなが採集した生物の名前を調べる会が、遊学館で行われました。夏の終わりの楽しいひとときでした。

トンボ池で大量に出現したアメリカザリガニについて

トンボの池でアメリカザリガニが初めて確認されたのは2000年5月31日のことです。観測データの記録をみると、貝塚高校の生徒さん達が池掃除をした際に、小型のものを2~3個体捕獲したというものがあります。正確な大きさや個体数について、今となっては知る由もありませんが、いずれにせよ、当時、あまり目立たない存在であったのは確かです。トンボの池に放流された生物の記録として、アメリカザリガニ発見以降の日付をみると、金魚の目撃や捕獲の記録だけが6月~7月の後半まで散発的に残されています。アメリカザリガニが再び記録に登場したのは初記録から2ヵ月後の7月29日のことです。このとき、自然生態園をつくる会の池掃除作業において、一挙に60個体を捕獲した、とあります。

トンボの池でアメリカザリガニを毎日目にするようになったのは、その少し前からのことで、それとともに、この生物によると思われる影響が目につきはじめました。まず、1999年には水際の至る所でみられたアオモンイトトンボの羽化殻の数が少なくなりました。「アオモンイトトンボが減ってるんじゃないか」と、池をみながら自然生態園をつくる会の平峰さんが話していたのですが、後にそれが事実であったことを知るのです。そして、トンボの池の水面を覆い尽くす程に繁茂していたクロモが急激に減少し、とうとうほとんどみられない程になりました。クロモのなくなってしまったトンボの池の水は、アメリカザリガニが動き回ることによって、常に濁ったままの泥水と化し、トンボの池はず

いぶん様子が変わりました。

結局、市民の森に自然生態園をつくる会の人たちは、2000年9月16日にトンボの池の水を抜き、アメリカザリガニと金魚を一斉捕獲するとともに、ヤゴを保護しました。このときのヤゴの種別個体数と、1999年11月13日に水を抜いて底さらえをしたときのヤゴの種別個体数を比較してみました。まずヤゴの総数ですが、1999年には1806個体だったのが2000年は121個体と、15分の1にまで減少しました。種別に見ると、ショウジョウトンボとアオモンイトトンボの数が100分の1に減っており、最もひどい状態です。ウスバキトンボは半分ほどにしか減っていませんでしたが、もともと1999年の記録数が少ない（11個体）ことと、南方系のこのトンボは、毎年春、南西諸島で羽化したものが、日本列島を北上しながら繁殖を続け、秋になると寒さに耐えきれず、次々に死滅して行く、という、他のトンボとはかなり違った習性があるため、同じように扱うべきではないかもしれません。その他、すべてのヤゴが個体数の桁をひとつ減らしており、アメリカザリガニの存在はトンボの池に生息する多くのヤゴに影響を与えたと考えていいのではないのでしょうか。

では、アメリカザリガニはヤゴ達にどういう影響を与えたのでしょうか？当たり前のようにですが、アメリカザリガニがヤゴを捕食したことが考えられます。しかし、ヤゴと言う生物はそんなに簡単にアメリカザリガニに捕食されてしまうものなのでしょうか、彼らのうち、イトトンボ類以外は、直腸から水を噴射して水中を「飛ぶ」ジェット噴射を使い、瞬時に移動できます。彼らがこのような技をアメリカザリガニに対して使わなかったということは考えにくく、そうやって逃げたにも関わらず捕食された

とすれば、その理由として考えられることはまず、アメリカザリガニの個体密度が高かったこと、そして、アメリカザリガニが雑食性であり、水草（クロモ）を食べてしまったことにより、ヤゴの隠れ家が減少してしまったことではないでしょうか。どんなに逃げるのが上手くても、狭い池の中で隠れるところが無く、捕食者の数が多ければ、いつかはやられてしまうことでしょう。アメリカザリガニがクロモを食べていたということについては、一斉捕獲の時のアメリカザリガニの数は154個体、10個体の平均が20グラム程あったので、おおまかに計算すると、じつに3000グラムもの重量に達するということになりま。これほどまでに成長するためにはとてもヤゴを捕食するだけでは間に合わないでしょう。むしろ、アメリカザリガニはクロモを主食にしていたと考えてもいいかもしれません。先にも述べたようにクロモは、アメリカザリガニ大量出現の後、1カ月程の間にほとんど消滅しました。クロモの消滅が、他の生物による食害以外の原因、例えば水質の急変などで枯死したとすれば、死んだ組織の破片でトンボの池は覆い尽くされたことでしょうが、そのようなものはクロモが急減していくなかで見られませんでした。そして、ほぼ毎日、誰かがトンボの池の生物を観察していますが、クロモを大量に食べる事が出来る生物は、アメリカザリガニをおいて他に見あたりません。住み家、あるいは隠れ家である水草を失ったヤゴは、遮るもののなくなった池の中で次々にアメリカザリガニに捕食されていったのではないのでしょうか。2000年のヤゴの記録で最も数の多かったシオカラトンボのヤゴは、泥に潜る習性がつよく、全体の体の

構造や前脚のつくりも他のヤゴに比べて、何かに潜るのに適した形になっています。つまり、水草がなくなっても泥の中や石の下に身を隠すことができるシオカラトンボのヤゴは、比較的アメリカザリガニの食害をまぬがれた可能性があります。いずれにせよ、トンボの池に入ったアメリカザリガニは、金魚とは比べものにならないくらい厄介者のようです。そして、これを取り除くことは更に厄介なことのようです。大勢の人数で、池の水を抜いて、泥を掘り返し、石をひっくり返して何度も捕獲しても、どうやら石垣の奥深くに残党がいたらしく、2001年1月の時点では、それら生き残りの次の世代の子ザリガニ達が、多数、確認されるようになりました。どうやら、今年もアメリカザリガニとおつきあいすることになりそうです。とって、去年のようなことになっても困るので、ザリガニ用のトラップを常時仕掛けて置くなどして、彼らが増えすぎないような対策を講じる必要があります。

(渡部哲也)

【身近な生き物トピックス】

・ブチサンショウウオ

現在遊学館には2匹のブチサンショウウオがいます。1匹は1999年11月23日に近木川源流で、もう1匹は2000年10月22日に和歌山県護摩壇山で、ブナの朽木内から採集されたものです。今は元気にミルワーム（ゴミムシダマシの幼虫）や小昆虫を食べています。食べすぎてお腹が大きくなった姿は、まるでツチノコのようなのです。

・近木川河口のヨコヤアナジャコ

昨年の初夏(2000.6.5)、二色小5年生の武井夏樹君が潮の引いている近木川河口でたくさんのケフサイソガニを採集してきましたのですが、そのバケツの中に混ざってヨコヤアナジャコが1匹入っていました。捕まえてよく見ると、胸に二枚貝を付けています。アナジャコ類に寄生することが知られているマゴコロガイです。この貝はWWFのサイエンスレポートによると“絶滅寸前”にランクされています。それから気にして近木川河口を見て回っているのですが、未だヨコヤアナジャコらしき巣穴も見つかっていません。今後の調査課題です。

・4種類の花が植えられました

遊学館横の花壇に2月14日、パンジー（すみれ科）、ネモフィラ（はぜりそう科）、フェリシア〔ブルーデージー〕（きく科）、クリサンセマム（きく科）の4種の花約500株が植えられました。

・玄関ロビーの海水魚

遊学館玄関ロビーの海水魚水槽では現在、クロダイ（チヌ）、メジナ（グレ）、ギンユゴイ、オキフエダイ、アカオビシマハゼ、ドロメ、イトマキヒトデ、スナモグリ、イシガニなどを飼育しています。海水交換の際、海水は岬町の栽培漁業センターより頂いているのですが、昨年11月に行った時、マコガレイとオニオコゼの幼魚（6月生まれ）も譲り受け、新しく仲間入りしました。水槽の底でじっとしており、たまにひらひら、ぱたぱたと泳ぐ姿は、まさしく今はやりの「癒し系」です。ぜひ一度見に来てください。

自然遊学館だより 2001 春号 (No.20)

発行日 2001.2.15

貝塚市立自然遊学館

〒597-0091

貝塚市二色3丁目26-1

TEL. 0724(31)8457
